

派遣者番号	R2K18	氏名	中原 祥雄
研究主題 —副主題—	道徳科における児童の問題解決的な学習の在り方 —テーマ性のある授業づくりを通して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	永田 繁雄
所属	日野市立日野第六小学校	所属長	横田 美賢

キーワード：「特別の教科 道徳」 学習テーマ 問題解決的な学習

1 研究の背景と目的

「特別の教科 道徳」は、小学校において平成 30 年度より全面実施されている。しかし、それは、従来の道徳の時間がいかに形骸化し、道徳教育の要として有効に機能していなかったかを意味しているとも言える。そして、その要因の一つとして、道徳科の指導方法への理解が十分でなく、不安を抱えている教員が多いことが挙げられる。東京都内公立小学校 17 校を対象とした道徳科の授業に関するアンケート調査（令和2年度8月実施）でも、道徳科の時間への印象について、「やり方が分からない、負担だ、苦手だ」という意見が一定数を占めており、道徳科の時間に対する教員の消極的な意識が根強くあることが浮き彫りとなった。

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議（2016）による報告において示された、三つの質の高い多様な指導方法の一つに問題解決的な学習がある。しかし、道徳科の指導方法への理解が十分でない教員にとって、このような学習は混乱を招いていると考える。

そこで本研究では、「テーマ性のある問題解決的な学習」に焦点を当て、その学習の幾つかの在り方を構想し検証する中で、相互の良さを比較検討し、それぞれの意味付けをすることを目的とする。

2 研究の方法

(1) 基礎研究

道徳科の時間が問題解決的な学習を避けていた背景とその学習の必要性、問題解決的な学習に対する研究者の捉え方を考察した。

(2) 調査研究

令和2年度東京都内公立小学校 17 校の教員を対象とした道徳科の授業に関する教員の意識調査を実施し、分析を行った。

(3) 実践研究

基礎研究と調査研究から導かれた実践の方向性を基に、テーマ性のある問題解決的な学習のスタイルを四点構想し、授業実践、分析した。

3 研究の結果

(1) 基礎研究

ア 道徳科が問題解決的な学習を避けていた背景
道徳科が教科化されるまでは、問題解決的な学習は違うという意識が、道徳科における問題解決的な学習への否定的な認識につながったと捉えた。

イ 道徳科における問題解決的な学習の必要性
道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議（2016）による報告において、現在行われている道徳教育は、指導内容や指導方法に関して、学校や教員によって充実度に差があり、学習の目的が十分に果たされていない状況であると指摘した。そして、道徳科の学習において、人間の強さ・弱さを見つめながら、理性によって自らコントロールし、より良く生きるための基盤となる力を育てることの必要性を示した。このように、子供は日常の中で常に様々な問題を解決しながら成長していくという視点の下、問題解決の力を育てることを道徳の学習に求めた。

ウ 問題解決的な学習への研究者の捉え方

全ての研究者に共通する考え方は、児童の問題意識に基づいたテーマを学習問題にすることであった。しかし、問題解決における話合いの焦点の当て方については、道徳的諸価値を重視するものや、問題解決のためのより具体的な行動を重視するものなど、研究者によって異なっていた。

(2) 調査研究

ア 調査の実施概要

名称：道徳科の授業に関するアンケート

対象：東京都内公立小学校 17 校の教員で教職教職歴3年以上の担任、管理職、担任の経験のある講師

配布数：351部

期間：令和2年7月29日～8月31日

有効返送数：142部（回答に不備があるものは参考回答として活用）

イ 調査結果の概要

(ア) 「特別の教科 道徳」における問題解決的な学習へのイメージ

一人一人が自分の解決策を決めるもの、問題意識をもって学習するものへの意識が強い。

(イ) 「特別の教科 道徳」におけるテーマのイメージ

主に道徳的価値、子供の実態、日常の生活、社会問題に求める傾向が見られた。この四点から問題解決的な学習を構想する。

(3) 実践研究

ア 問題解決的な学習のスタイルの検討

基礎研究と調査研究を重ね、問題解決的な学習の方向性を考えた。自己投影スタイル、現実対向スタイル、価値追求スタイル、批判検討スタイルである。

イ 授業の構想と検証授業の実施

この四点の学習スタイルに、東京学芸大学道徳教育研究会(2019)が提唱する、発問の四点の立ち位置や教材のもつ特質を重ね合わせ、授業実践のための教材や主な中心的な発問を具体的に構想し、実践した(表1)。

表1 授業実践のための具体的構想

スタイルの種類	主題(内容項目) 使用教材(出典)	中心的なテーマ発問
自己投影スタイル	教材:大きな絵はがき 主題:友だちならどうすべきか(友情、信頼)	あなたがひろ子だったら、料金不足を伝えるか、伝えないか。また、その理由は何か。
現実対向スタイル	教材:クラスたいこう全員リレー 主題:どうすればよいのか(善悪の判断)	どうすることが一番よいと思うか。また、その理由は何か。
価値追求スタイル	教材:花さき山 主題:美しさとはなにか(感動、畏敬の念)	「花さき山」が教えてくれた「美しさ」を考えよう。その美しさを集めよう。
批判検討スタイル	教材:いのりの手 主題:信頼し合う友(友情、信頼)	二人の関係をどう考えるか。

ウ 分析から見える授業スタイルの特徴

授業後の児童への学習アンケートにおける自己評価と自由記述内容の分析、抽出児童へのインタビューを基に、各授業スタイルの特徴を分析した。その結果、特に以下のような特徴が整理された。

自己投影スタイルは、学習テーマが道徳的問題を自分事として捉えやすいものである。その結果、児童が自身の立ち位置を明確にでき、それぞれの考えの違いが鮮明となる。こうした意見の対立構造から、話し合いがより活発になる。更には、新たな視点への広がりも見られ、多様な考え方が生まれやすい。

現実対向スタイルは、教材が学校生活の具体

的な場面に即したものであり、また学習テーマも児童にとって切実感のあるものである。その結果、児童の学習意欲を喚起すると同時に考えをイメージしやすい。そしてその結果、様々な立場からの意見が生まれ、児童が納得解を発見しやすい。

価値追求スタイルは、物語への共感を土台とし、学習テーマに対して個々の意見を積み重ね、それを基に協同して追求するスタイルである。児童一人一人の意見が重なり合うことで、個人では見えなかった新たな視点や深い考えを引き出すことができる。そして、それが最終的には各児童の考えを深めることに繋がる。

批判検討スタイルは、学習テーマが道徳的問題に対してより客観的な立場で捉えやすいものである。児童は様々な視点で自分の考えを示しやすく、それによって多様な視点からの意見が生まれ、納得解を発見しやすい。

4 研究の考察

本研究全体として明らかになったのは、「特別の教科 道徳」において、テーマ性のある問題解決的な授業が有効であること、テーマ性のある四点の授業スタイルにはそれぞれに特有の効果的な良さがあること、柔軟で多様な授業展開(スタイル)によって「特別の教科 道徳」の授業を活性化することの三点である。

課題としては、各授業スタイル同士による児童の問題解決的な学習への受け止めに温度差があること、各授業スタイルと教材について限定的な実践であるため、他の組合せの可能性が未検証であることの二点である。

本研究で構想した学習スタイルは、本実践の教材だけに閉じられるものではなく、児童の実態などを考慮しつつ、更に多様に開かれるものである。今後は、様々な教材のもつ特性に応じて、スタイルを組み合わせ、その有効性を検証し、研究の可能性を広げていく。

5 今後の展望

本研究の成果を活用し、授業を日常的に活性化させていこうと考える。また、本研究を学校や保護者、研究会などにおいて還元し、地域全体を通して道徳教育の充実を図っていきたいと考える。